

## ヴァレリー・スティーレル氏（ゲストキュレーター）によるオンラインギャラリートーク・和訳

こんにちは。FIT 美術館（ニューヨーク州立ファッション工科大学併設の美術館）のディレクター兼チーフキュレーターのヴァレリー・スティーレルです。この度、日本の神戸にある神戸ファッション美術館のゲストキュレーターに迎えられました。フランス最員の私は、神戸ファッション美術館での展示の第1章をフランスのファッションにあてることにしました。神戸ファッション美術館は、18世紀のフランス、イギリスのファッションに関する素晴らしい作品を所蔵しています。ローブ・ア・ラ・フランセーズから、ローブ・ラングレーズ、エンパイア・ドレス、シューズや扇などの美しいアクセサリーの数々、そして素晴らしい男性の衣装が所蔵されています。ですから、18世紀の衣装の変遷、色鮮やかなものや刺繍されたものからシンプルでダークな色へと移っていく男性衣装の変遷、「Great Male Renunciation（18世紀後期に男性衣装が、女性の衣装とは異なり華やかな装いをやめたという現象）」と呼ばれるものを見ることができます。日本において「ロココ」のファッションのイメージは、スイートでフェミニンなもののように、それは、サブカルチャーのロリータ・ルックといったところへ現れています。

第2章は、シャネルと彼女のライバルたちという視点から見ていきます。2章の前半では、20世紀初頭にシャネルと競合した女性のデザイナーたちの作品を見ることができます。後半は、第二次世界大戦後に競合した男性のデザイナーたちの作品が展示されています。もちろんシャネルといえば「リトル・ブラック・ドレス」が最も有名ですが、神戸ファッション美術館には、それらの美しいドレスの例となるようなものもいくつか所蔵されており、1920年から30年代のイブニング・ドレス、デイ・スーツといったものです。シャネルだけが「リトル・ブラック・ドレス」を生み出した唯一の女性ではありません。同時代の競合として他にも美しい例をみることができます。ジャンヌ・ランヴァンです。彼女は、リトル・ブラック・ドレスをよりロマンティックでフェミニンなバージョンにデザインしています。そこには、少し18世紀のテイストが採り入れられており、広がりのあるスカート、それはシャネルの好んだストレートなラインとは少し違うものです。キャロ姉妹店は、20世紀初頭にそのキャリアをスタートし、マドレーヌ・ヴィオネを教え、彼女はやがて身体の美しさを見せるドレスをデザインすることで知られるデザイナーとなっています。1930年代のシャネルの最大のライバルは、エルザ・スカパリでしょう。彼女は、イタリア生まれのファッションデザイナーで、自身のことをアーティストと称しています。ショッキング・ピンクや肩幅の広い彫刻的なデザインで知られています。自らをアーティストと称し、彼女のドレスに見られる過剰ともいえるような芸術的な刺繍には、

フランスのクチュリエの技をみることができます。第二次世界大戦後にファッションは変化します。シャネルのボーイッシュなスタイルに背をむけるような、過剰な女性性を急進的に示したパイオニアであるクリスチャン・ディオールへとといったファッションの変化が occurred。このディオールのブルーのドレスは、背部はベルエポック調で、ノスタルジックな女性性が創造された作品です。こちらも同様、戦後の著名なデザイナーであるピエール・バルマンは、ルシアン・ルロンのメゾンで、ディオールと一緒に働いていました。彼は 1945 年に自分のお店を開店し、戦後のフランスのクチュリエ界に新風を起こしました。戦後数年してからシャネルは復帰し、新しいバージョンで彼女の有名なスーツを創造します。またシャネルは、イヴ・サンローランやクレージュといった新しい世代のデザイナーともよく引き合いに出されますがそれは、いわゆる女性性のイメージとは違ったものでした。マダム・グレは、第二次大戦前から大戦後を通して活躍したシャネルと同時代に活躍した数少ない女性のデザイナーです。

第 3 章では、日本のきものが、西洋のファッションに与えた影響について紹介しています。右側にはポール・ポワレのドレス、中央にはきもの、そして左側には 1890 年代の美しいガウンが展示されています。19 世紀のコルセットを装着したスタイルからハイウエストで垂直なデザインへというファッションの変遷をみることができます。ポール・ポワレがきものから強く触発されたことがうかがえます。こちらのフォルチュニも 20 世紀初頭のパイオニア的なデザイナーです。日本やアジアのクラシカルなドレスから多大なインスピレーションをえたことがうかがえます。また日本からの影響は、扇などを含めたヴィジュアル作品の中にもみてとれます。

最後の章では、驚くべきコレクションの数を誇る神戸ファッション美術所蔵のファッション写真に焦点をあてています。この展示で興味深いのは、1939 年のヴォーグ US 版に掲載されているホルスト・P・ホルスト撮影のマンボッシュのコルセットの作品が、同様のものが壁に写真作品として比較展示されている点です。展示されているファッション写真は、他にもリチャード・アヴェドン、アーヴィング・ペン、ニック・ナイトといった現代の写真家たちの作品も含まれています。そして展示の最後には、ラディカルな 3 人の日本人のデザイナーのドレス、右からヨウジヤマモト、コムデギャルソンの川久保玲、イッセイミヤケといったグローバルファッションの中で革新的なデザイナーの作品です。神戸ファッション美術館のスタッフとの仕事は素晴らしいものでした。そして、オンラインギャラリートークへとアクセスして下さった皆様ありがとうございました。

(訳：神戸ファッション美術館)